

現代日本語と中国語における同形疊語の比較考察

陳 月吾* 童 江寧**

Comparison of Reduplicated Words of the Same Form

in Modern Japanese and Chinese

Yuewu Chen Jiangning Tong

Abstract

A vast number of reduplicated words are widely used in Japanese language as well as in Chinese language. In the two languages this grammatical term refers to the same phenomenon. Furthermore, many reduplicated words made by Chinese characters share the same form. Due to the same form, they are easily misused. To us Japanese learners whose mother language is Chinese, how to distinguish them is extremely important. In this paper, a lot of comparisons based on a large amount of examples have been done. It will help us understand the similarities and differences between them.

『語彙の研究と教育』(国立国語研究所)では、日本語における疊語について以下のように説明してある。「言語には語全体を重複させて別の語を作る手段があつて、重複によって生まれた語は<疊語>と呼ばれている。広義の疊語には、音素、音節、語根、語幹、連語(句)などを重複させて出来たものも含められている。厳密に言うときには、音素や音節については<疊音>が、連語(句)の重複については<疊句>が用いられることもある。」

一方、中国語における疊語について、『修辭通鑑』(中国青年出版社)では「疊音即相同的詞、詞素或音節重叠使用，又称疊詞。詞的重叠指詞的重叠式。詞素的重叠或音節的重叠指疊音詞。」と説明してある。

上の説明から分かるように、日本語でも中国語でも、疊語という文法用語は同じものを指している。それでは、次の例文を見てみよう。

<1> 人人都有一双手，別人能干的活我也能干。(『現代漢語詞典』)

<2> 自分の家へ客でも訪れるのかと思うと、それが往来の人々であるには驚かされる。
(島崎藤村『千曲川のスケッチ』)

以上の二つの例文は全部「人人」¹を含む。中国語の“人人”は「みんな、すべての人、だれでも」という所謂「単数扱い」されている。英語の「Everyone」もしくは「Everybody」の意味であるが、「量的には数多い」という意味合いが含まれている。例<1>を日本語に訳すと、「人間の誰でも両手を持っている。ほかの人が出来ることは私にも出来る。」²となる。一方、日本語の例文<2>の中の「人人」は間違いなく複数を表していて、中国語の“人人”と同じように、「量的には数多い」という意味合いが含まれている。だが、この「量的に数多い」という複数性は単なる数の累加ではなく、「 $1 + 1 + \dots + 1 = N$ のよ

* 教養部

** 中国、中南大学外国語学院

うに、個性を残しつつその類の多数をさすく複個数>を表象していると考えられる。」³

実は日中両国語におけるこうした同形疊語はほかにも多数存在する。調査結果は以下のとおりである。

暗暗、白白、常常、楚楚、处处/处处⁴、淡淡、家家、久久、漫漫、每每/每每、綿綿/綿綿、明明、默默/默默、年年、輕輕/轻轻、人人、時時/时时、堂堂、滔滔、往往、徐徐、洋洋、様様/样样、快快、一一、早早、種種/种种

前述の定義に基づいて、日本語においても中国語においても疊語だと言えそうな語を拾い出してみた。あわせて 27 個くらいある。説明しておくが、同形疊語を調べる際、本稿では、日本語につき『広辞苑』、中国語につき『現代汉语词典』を主に参考資料とし、同時に両辞書の見出し語になっている語のみを取り出した。また、日本語において疊語だと言えども中国語にはない語、あるいはその逆のケースも多数存在する。例えば、「木木」と“刚刚”のような語があげられる。「多くの木々」と日本語で言えるのに対し、“刚刚买来的书。/さっき買ってきた本。”と中国語で言える。“木木”という単語は中国語に存在しないということと同様に、日本語では「剛剛」という形を取る語はないのである。

さて、次の例文を見てみよう。

<3>彼も黙々としてあるいた。もう恋人同志の気分になっていた。だから、黙々として
いる方がふさわしい。

(織田作之助『四月馬鹿』)

<4>電灯が明るくついているだけで、人々の姿は見えない。

(豊島与志雄『待つ者』)

例文<3>の中の「黙々」に注目しよう。「黙々」は日本語の中のいわゆる二字漢語に属する。反復部分の「黙」は単独で使用することはめったにないとされる。一方、例文<2>の中の「人人」の反復部分「人」は実際の意味を持つ上、単独でもよく用いられている(例文<4>)。同じく“默默”などについてのこういった違いは中国語にも存在する。従って、先にあげた同形疊語を二種類に分けることが出来る。

< A >

白白、常常、处处/处处、家家、
久久、年年、輕輕/轻轻、人人、
時時/时时、一一、早早

(11 個)

< B >

暗暗、楚楚、淡淡、每每/每每、
漫漫、綿綿/綿綿、明明、默默/
默默、堂堂、滔滔、往往、徐徐、
洋洋、様様/样样、快快、種種/
种种

(16 個)

つまり、反復部分が単独で利用できる語< A >と反復部分が単独で利用できない語< B >という二種類である。さらに、見て分かるように、< B >のほとんどは二字漢語である上、日本語における読み方として音読み⁵するのが普通である。一方、< A >については訓読みするのが一般的である。日本語と中国語におけるこうした同形疊語は一体どういう違いがあるだろう。本稿では主に< A >部分の同形疊語を中心に例文をあげながら比較考察を行う。

○ 白白⁶「しらじら」/白白“báibái”

<5>一天的时光白白浪费了。/一日の時間を空しく過ごした。

(『現代汉语词典』)

<6>半身を起して眺めると、閉め忘れた雨戸の間から、白々とした夜明の微光が見えた。

(豊島与志雄『初秋海浜記』)

<7>その薄黒い、落ち窪んだ両眼は、老人のように白々と弱り込んで、唇が紙のように干乾びていた。

(夢野久作『白菊』)

中国語の例文<5>の“白白”は「効果がない；徒然」の意味であるのに対し、例文<6>の中の「白白」は「夜が次第に明けて白むさま」の意味である。さらに例文<7>における「白白」は「はっきり、見え透いた」という意味で使用されている。ということで、日本語と中国語における両者の意味は完全に異なる。

○ 常常「つねづね」/常常“chángcháng”

<8>他工作积极、常常受到表扬。/彼は仕事に熱心で、よく褒められる。

(『現代汉语词典』)

<9>彼は愛人の心を常々疑っていたのである。

(坂口安吾『我が人生観』)

<10>常々の心構え。

(『広辞苑』)

例文<8>の“常常”と例文<9>の「常々」はほぼ同じ意味として用いられている。そして、品詞上から見れば、同様に副詞である。しかし、「常常」は名詞としても使用できる。例<10>はその用法である。“常常的心理准备”とか言えないように、中国語の“常常”は名詞の機能を持っていないと考えられる。

○ 处处⁷「ところどころ」/处处“chùchù”

<11>祖国处处有亲人。/祖国のどこにでも身内がいる。

(『現代汉语词典』)

<12>店が処々に散らばっている。

(『日中辞典』)

<13>野原には処々に花が咲いている。

(『日中辞典』)

中国語例文<11>の“处处”は「各地」の意味に相当し、例文<12>の「処処」の意味と大体同じであるが、例文<13>の「処処」の「若干の箇所」の意味を持たない。よって、この量語は日本語である時、意味用法がより豊かであると考えてもよい。

○ 家家「いえいえ」/家家“jiājiā”

<14>村子里家家喂猪养鸡。/村中のどの家でも豚と鶏を飼っている。

(『現代汉语词典』)

<15>裏通りなど歩くと、その木端屋根の上に、大きなごろた石を載せた家々もある。

(宮本百合子『夏遠き山』)

例<14>の“家家”も例<15>の「家々」も同じく「量的に数多い」という複数性を表しているが、日本語「家家」の複数性は単なる数の累加ではなく、「 $1 + 1 + \dots + 1 = N$ 」のように、個性を残しつつその類の多数をさす＜複個数＞を表象していると考えられる。

○ 久久「ひさびさ」/久久“jiǔjiǔ”

<16>心情激动，久久不能平静。/感動しちゃって、気持ちが長いこと静まらない。

(『現代汉语词典』)

<17>「久々住みなれた故郷をふり捨て」(針立雷『狂言記』)(『大辞林』より)

<18>久々の晴天。

(坂口安吾『ゴルフと「悪い仲間」』)

例文<16>の“久久”は「長い間」という意味合いで、例文<17>の「久々」の意味とはほぼ一致する。しかし、日本語の「久久」にはもう一つ「ひさしぶり」の意味が存在する。例文<18>の「久々」はこれに当たる。

○ 年年⁸「としどし」/年年“niánnián”

<19>年年丰收。/年々豊作。

(『現代汉语词典』)

<20>そういう懐かしい名前が年々に一つ減り二つ減って行くのがさびしい。

(寺田寅彦『年賀状』)

例文<19>の“年年”と<20>の「年年」は意味上変わりはなく、「年ごと、毎年」の意味である。

○ 輕輕⁹「かるがる」/轻轻“qīngqīng”

<21>轻轻推了他一下。/軽く彼を押した。

(『現代汉语词典』)

<22>二十貫に近い大束を軽々と担ぎ上げた。

(菊池寛『仇討三態』)

例文<21>の“轻轻”は「あまり力を入れない」という意味で、“轻”という語を重複させることによって、「軽い」の意味を強めることができたと考える。一方、日本語の「輕輕」は「軽く見えるさま、軽そうなさま」という意味合いで、形容詞「軽い」の意味の強調形だとは言にくい。例えば、「軽々と彼を押した。」という言い方は存在しない。

○ 時時「ときどき」/时时“shíshí”

<23>二十年来我时时想起这件事。/20年来、私は時々このことを思い出す。

(『現代汉语词典』)

<24>时时不忘自己是人民的勤务员。/自分は人民の勤務員であることをいつまでも忘れない。

(『現代汉语词典』)

<25>時々お目にかかります。

(『広辞苑』)

例文<23>の“时时”と<25>の「時々」は同じく頻度を表す副詞であり、「いつもではないが、時として」と言う意味を表す。しかし、中国語“时时”は<24>の“不忘”のような否定句¹⁰とともに用いられると、「いつまでも」という肯定強調の意味が出てくる。

○ 一一「いちいち」/一一“yīyī”

<26>先进人物太多，无法一一介绍。/模範的な人があまりにも多くて、一々紹介するわけにはいかない。

(『現代汉语词典』)

<27>学者と云うものは頼みもせぬ事を一々説明してくれる者である。

(夏目漱石『琴のそら音』)

例文<26>の“一一”と<27>の「一一」はほぼ同じ意味で、「一つ一つのこと、一つずつすべてに及ぶこと、一人一人」の意を表す。

○ 早早¹¹「はやばや」/早早“zǎozǎo”

<28>要来, 明天早早来。/明日来るなら、早く来い。

(『現代汉语词典』)

<29>早早と到着する。

(『広辞苑』)

例文<28>の“早早”と<29>の「早早」は同じ意味で、「甚だ早く」という強調の意味を表していると考えられる。

以上は現代日本語と中国語における同形畳語について、主に A グループの反復部分が単独で利用できる同形畳語を中心に比較考察を行った。大別すれば、こうした同形畳語を次の五種類に分類できる。

ア：意味用法がほぼ一致しているもの：「年年、一一、早早」

イ：日本語である時、意味用法が豊富なもの：「常常、处处/处处、久久」

ウ：中国語である時、意味用法が豊富なもの：「時時/时时」

エ：似ているが、微妙に異なるもの：「人人、家家、輕輕/轻轻」

オ：意味用法が完全に異なるもの：「白白」

以上の比較考察が中国語を母語とする日本語学習者、あるいは日本語を母語とする中国語学習者にとって少しでも参考になるならば、幸いである。

注釈

1、畳語の書き方についてやや違うところがある。例えば日本語で「人々」と書くのが普通であるのに対し、中国語では“人人”と、「々」のかわりに、前部分と同じものを後ろにつける。しかし、両者は実質的に変わりのないものとする。本稿では、日本語の例文にのみ「〇々」という書き方をする。

2、本稿における中国語例文の日本語訳は全部筆者が翻訳したものである。

3、『語彙の研究と教育(下)』p 40による。

4、現代中国語においてはいわゆる簡体字が使用されている。実質上同一の漢字であるが、両国語における漢字の形がやや異なる場合も見られる。本稿でこういった漢字で作られた畳語も同形畳語と見なし、考察対象に入れることにする。そして、以下の用例を「处处（日本語）/处处（中国語）」のように提示する。

5、のほとんどは音読みであることは間違いない。しかし、特例も存在する。例えば、「暗暗」は「あんあん」という読み方のほか、「くらぐら」という読み方の存在も認められる。だが、資料を調べたところ、「暗暗」という二文字を用いた文のほとんどは「暗々裏（あんあんり）」「暗々の内（あんあんのうち）」のような使い方をしている。例えば：人々は暗々裏にそれに脅かされている（有島武郎『生まれいずる悩み』）。従って、本稿では「暗暗」をグループにする。また、反復部分の「暗」は「くら」という訓読みも存在するが、既に二字漢語グループにしたため、ここでの単独部分の読み方は全部音読みを指す。よって、「種種」の単独部分「種」の読み方について、「たね」という読み方ではなく「しゅ」という読み方をとる。

6、「しろしろ」という読み方もある。

7、日本語において「处处」より「所所」という書き方をするのがより一般的なようである。

8、「ねんねん」という読み方もある。

9、「けいけい」という読み方もある。

10、“不忘”のほかに、“时时”と一緒に使用できるこのような否定句はめったにない。

11、「そうそう」という読み方もある。

例文出典

青空文庫：<http://www.aozora.gr.jp/>

『現代汉语词典』 商务印书馆（1996）

『日中辞典』 小学館（1987）

『広辞苑』 岩波書店（2004）

参考文献

熊谷忠三郎（1973） 『豊語の研究』、創文社

向宏業（1998） 『修辞通鑑』、中国青年出版社

譙燕（2002） 「豊語副詞の構成」『日本学研究 11』、北京日本学研究中心

（2005） 「豊語名詞の意味」『日本学研究 15』、北京日本学研究中心

玉村文郎（1985） 『語彙の研究と教育（下）』（国立国語研究所日本語教育指導参考書 13）

野原亮子（1989） 「豊語について」『九州大学留学生教育センター紀要』第1号、九州大学留学生教育センター、pp. 91-103 参考文献

（平成 21 年 3 月 31 日受理）